

修正版グラウンディド・セオリー・アプローチを用いた
小学校と地域の協働活動における高齢者ボランティアの意識変容の分析

Analysis of Changes in Consciousness of Elderly People Who Participate
in Collaborative Activities Between Elementary Schools and Local Communities
Using an Analytical Method (Modified Grounded Theory Approach)

柳沼 晴香¹・石井 大一郎²
YAGINUMA Haruka, ISHII Daiichiro

¹栃木県庁

²宇都宮大学地域デザイン科学部准教授

修正版グラウンディド・セオリー・アプローチを用いた
小学校と地域の協働活動における高齢者ボランティアの意識変容の分析
Analysis of Changes in Consciousness of Elderly People Who Participate in Collaborative
Activities Between Elementary Schools and Local Communities
Using an Analytical Method (Modified Grounded Theory Approach)

柳沼 晴香¹・石井 大一朗²

YAGINUMA Haruka, ISHII Daiichiro

本研究は、近年、質的研究の分析方法として多く用いられる修正版グラウンディド・セオリー・アプローチの特徴を整理するとともに、この分析手法を用いて、高齢者ボランティアが、小学生と交流活動をするを通してどのように活動の意義を見出し、また生きがいを得ているのかについて、時間的経過に着目して明らかにするものである。分析の結果、小学校と地域の協働活動の1つである放課後子ども教室が、高齢者ボランティアにとって「エネルギーの源」を得る場となっていること、また、参加の継続に至る過程において子どもとのふれあいを通じた「通じ合う心」「子どもから得る刺激」「地域の一員としての子ども」の認知が重要であることが示された。子どもと関わる活動においては、こうした意識を高齢者ボランティアが得やすいコーディネートやプログラムづくりを行う必要があることが示された。

キーワード：修正版グラウンディド・セオリー・アプローチ、世代間交流、高齢者ボランティア、生きがい

I. はじめに

本研究は、近年、質的研究において多く用いられる分析手法の修正版グラウンディド・セオリー・アプローチ (Modified grounded Theory Approach 以下、M-GTA とする。) の特徴を整理するとともに、この分析手法を用いて、高齢者ボランティアが、小学生と交流活動をするを通してどのように活動の意義を見出し、また生きがいを得ているのかを明らかにすることを目的とする。世代間交流が高齢者に対しプラスの影響をもたらすことは、先行研究でも明らかにされているが、どのような経緯を経て高齢者ボランティアにプラスの影響を与えるのかについては十分に示されていない。こうした点について、M-GTA が得意とする人の意識の時間的経過に関して分析することで、新たな知見を導き出すものである。分析では、高齢者ボランティアが放課後子ども教室での子どもとの交流活動を通し、その意義を見出すまでのプロセスを、活動の「参加」と「継続」の観点に着目している。

¹ 栃木県庁 haruka.ygnm911@gmail.com

² 宇都宮大学地域デザイン科学部准教授 ish@cc.utsunomiya-u.ac.jp

II. 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの特徴

本章では、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GTA と示す）、M-GTA、KJ 法について特徴を把握する。GTA を用いた研究は、質的研究の状況を調査した戈木（2014）によれば、対象が保健医療系雑誌に限定されるが、1990～2010 年の間で増え続けており、2010 年には、それまで一番多かった KJ 法を用いた研究を、GTA を用いた研究が逆転している。GTA を用いた研究が注目されていることがわかる。なお、20 年間で最も多く発表されている論文は KJ 法を用いた研究である（別表 1 参照）。

1. GTA

GTA は 1960 年代頃から検討されてきた質的分析法で、一般的に、書籍としてグレーザーとストラウスが 1967 年に出版した『The Discovery of Grounded Theory』¹を原点に置くことが多い。GTA は、データに密着した分析から独自の理論生成を可能とする質的研究法として 1960 年代に提案された。看護・保健、ソーシャルワーク、介護、教育、リハビリテーション、臨床心理などヒューマンサービス領域を中心に広がったものである。また、適している研究として、木下（2007a）は、「研究対象としている現象がプロセス的な特性をもっている場合です。（中略）人間と人間が一定の社会的状況下、条件下でやりとりをするヒューマンサービスにおいては、健康問題であれ、生活援助の場合であれ、教育であれ、サービスを提供する側とそのサービスを受ける側という相互的関係が、何らかの形で始まって展開していったり、所定の目的が達成されていったり、いかなかったりというように現象そのものはプロセス的な性格をもっています。」と解説している。こうしたプロセスに着目する観点は GTA だけでなく、M-GTA のもつ重要な特徴でもある。

また、GTA、M-GTA、KJ 法の分析手法の比較を行った木野（2020）は、GTA の特徴を次のように整理している。「GTA は、文脈から、個別の部分を取り離し、個別の部分としての客観性を高め、科学的な方法で解釈していくことを目指しているように思われる。そのための一つの方法として、切片化と呼ばれる行為を行う。そして、切片化された部分の一つ一つを解釈しながら再構成していく。」この切片化は GTA を特徴づける極めて重要な作業である。

2. M-GTA

M-GTA は木下によって提唱された方法である²。M-GTA の特徴は、分析方法から確認すると GTA との違いを理解しやすい。他の GTA と異なり、M-GTA のみがもつ分析の特徴として「データを切片化しない。」という点がある。データを切片化しないことに関して木下（2007a）はその意味を次のように説明している。「（他の GTA に見られる）データからコードをつくり、次にコードから概念をつくっていくコーディング方式では分析者は分析作業を外化して手順重視で進めるのに

対して、修正版は grounded on data の 原則をぎりぎりまで維持しながら分析者自身における解釈作業を重視する。そして、データから直接概念を生成するので中間に構成要素の段階をおかない。その方が説明力に優れた概念を生成でき、また、そうした概念関係によって説得力のあるグラウンデッド・セオリーを提示できると考えるからである。」こうした点を特徴づけるキーワードとして「研究する人間」という表現を用いて強調している。また、こうした研究する人間を重視した分析を可能にするのが「分析ワークシート」を用いた概念生成であり、概念ごとに一枚のワークシートを作成する（別表 5 参照）。分析ワークシートを用いて概念を生成する方法は、他の GTA にはないオリジナルな部分である。

3. KJ 法

KJ 法は、川喜田二郎によって提唱された方法³である。川喜田（1967）は、発想法（KJ 法）は、「野外で観察した複雑多様なデータを、データそれ自体に語らしめつつ、いかにして啓発的にまとめたらよいかという課題から始まっている。」と述べている。KJ 法の手順は、ラベルづくり→グループ編成→図解化→叙述化の手順となる。GTA と KJ 法は言語データを細分化し、グループ分けをして図解化を行うという点は共通している。KJ 法はもともと著書のタイトルにあるように発想法として使用することを前提にしている。発想法と質的研究法は同義ではない。田中（2010）が整理しているように、研究法として用いる場合は、データ収集段階、分析段階、結果の提示段階において、情報を開示することが重要となる（別表 4 参照）。

3つの調査法に以上の特徴があることがわかった（別表 2 参照）。本研究においては、明らかにしようとする内容が意識変容、つまりプロセスの変化に着目している点。分析者の問題意識に基づいたデータのコンテキストの理解を重視し、かつ研究成果を学童における高齢者の活動継続のコーディネートに生かすといった、比較的狭い範囲の理論生成を目的としていることから M-GTA を分析方法として採用している。

III. 本研究の背景と目的

高齢化が急速に進む日本では、退職後の高齢者による社会参加・地域貢献が期待されている。高齢者の社会参加は、生きがいや幸福な老いにつながるとされており、多くの高齢者が社会的活動や地域活動に参加したいとの希望も持っている。内閣府（2018）の高齢社会対策大綱においても、今後は「高齢者を支える」発想とともに意欲ある高齢者の能力発揮を可能にする社会環境を整えることが必要であるとしており、高齢者の活躍の場が注目されている。

その高齢者の社会参加の 1 つとして、本研究では世代間交流に注目する。子どもと高齢者の世代間交流は、相互理解や世代継承性、生きがいの向上、地域共生意識の向上などの効果をもたらすと

され(糸井 2012)、高齢者自身の主観的健康感にも良い影響を与えている(藤原 2006) ことが分かっている。しかし近年、核家族化や地域社会の変化に伴い、世代間交流の機会が減少している。家族間での世代間交流を図ることが難しくなったことで、その交流の場が「地域」に委ねられている状況だ。

地域の高齢者と子どもが、日常的に世代間交流を行える場の1つとして、文部科学省が推進する「地域学校協働活動」がある。地域学校協働活動とは、「地域の高齢者、成人、学生、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体・機関等の幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子供たちの学びや成長を支えるとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動」である。2015年の中央教育審議会答申において提言され、全国的に推進されるようになったものである。高齢社会対策大綱(内閣府 2018)でも、高齢社会において求められる「高齢者の心の豊かさや生きがいの充足の機会」の1つとして地域学校協働活動での世代間交流が挙げられている。そこで本研究では、日常的に小学生との交流活動を行っている放課後子ども教室の高齢者ボランティアが、小学生と交流活動をするを通してどのように活動の意義を見出し、また生きがいを得ているのかを明らかにすることを目的とする。世代間交流が高齢者に対しプラスの影響をもたらすことは先行研究でも明らかにされているが、それがどのような経緯を経て高齢者に対し影響を与えているのかについての研究は見当たらない。本研究においては、分析の主題を高齢者ボランティアが放課後子ども教室での子どもとの交流活動を通し、その意義を見出すまでのプロセスとし、活動の「参加」と「継続」の観点に着目し、M-GTAを用いて分析を行う。

IV. 先行研究

核家族化や地域社会の変化により近年減少している「世代間交流」は、交流の主体者である高齢者と子どもの双方に効果があり、相互理解や生きがいの向上、主観的健康感、人間関係の広がり、地域共生意識などにつながると明らかにされている(糸井 2012、藤原 2006・2007)。本研究はこうした高齢者と子どもの交流が、参加する個人、地域づくりに効果をもたらすという前提に立っている。そして、これを促進するためには、特に高齢者が参加し、継続して活動していくためにどのような点が重要となるのかを理解することが必要となる。こうした点に着目し、世代間交流活動を通じた高齢者の意識変容を明らかにしたものに田淵(2008)の研究がある。田淵は、地域の祖父母世代の子育て支援に関わる動機として、子育てに限らず何らかの活動をしたくて支援を開始したという「一般的活動動機」と子育て支援を行いたいという「子育て支援特殊動機」を示した。そして、子育て支援の継続動機には「自己へのメリット」「人間関係の充実感」「活動自体の良さ」といった、自己への直接的・間接的メリットが動機となっているものと、「他者への貢献」といった利他的動機

を抽出している。このことは、活動を開始した当初から、継続し、現在に至る活動動機の意識変容を表しているともいえる。本研究は、田渕の「活動開始」と「その後」の意識変容に着目した調査項目や分析視点を参考にし、放課後子ども教室という日常的な場への継続した活動者を対象として、参加と継続の動機を詳細に把握し、新たな知見を導き出そうとするものである。また、活動開始とその後の意識変容については、速水（1995）が、ボランティア参加動機研究の中で、開始動機と継続動機を区別し、活動開始初期の外発的動機付けから次第に内発的動機付けに移行することを報告しており、「参加」と「継続」に分けて分析することの重要性を示している。

V. 調査の概要

1. 調査対象地と調査対象者

本研究の対象者は、次の2点を満たすものとした。a：60歳以上、b：活動に月1回以上参加し現在まで継続している。また、60歳以下の1名（表1中のX）にもボランティアとして同様に活動しているためインタビューを行なっているが分析には用いていない。

調査協力者は2つの学校の放課後子ども教室に参加するボランティアである（表1）。調査地は、宇都宮市の西方に広がる古い市街地にあり、両校ともに歴史は明治時代まで遡る伝統校である。この2校の放課後子ども教室を調査対象として選んだ理由は、次の通りである。週2回程度実施しており、定期的かつ継続的に高齢者が活動に参加している。プログラムが、高齢者と児童が自由にコミュニケーションをとれる内容となっている。

表1 調査協力者一覧

A 小学校	協力者	性別	年齢	活動年数	活動頻度
	A	男性	80代	8年	月1
	B	女性	70代	3年	月1
	C	女性	80代	3年	月1
	D	女性	70代	3年	月1
	E	男性	70代	1年	月1
	F	男性	70代	1年半	月1
	G	男性	70代	8年	月1
	X	女性	50代	2年	週1

B 小学校	協力者	性別	年齢	活動年数	活動頻度
	H	女性	70代	半年	月2
	I	女性	70代	2年	月2
	J	女性	60代	2年	月2
	K	女性	70代	2年	月2
	L	女性	70代	2年	月2
	M	女性	80代	2年	月2

2. 調査方法

各放課後子ども教室のコーディネーターに調整してもらい、活動の開始前や活動中の空き時間を利用して、別室等でインタビューを実施した。調査期間は2020年9月23日～2020年10月22日である。インタビューは調査の目的や倫理に関する説明を含め、半構造化インタビュー方式により各人30分程度を実施した⁴。了解を得てICレコーダーで録音し、その後テキスト化を行った。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、調査対象者に調査の趣旨と目的、回答は自由意思であり、拒否しても不利益と被らないこと、調査結果を公表する際には個人が特定できないようにすることを、文書を用いて口頭で説明し、調査協力の同意書を得て行った。また、一般社団法人社会調査協会の「社会調査協会倫理規定」に従い、個人のプライバシーについては十分に配慮し、データの入力、保管を行った。

4. インタビューガイド

特に地域の高齢者が活動に参加するようになってから現在の活動継続に至るまでの気持ちの変化や子どもたちに対する思いに注目しながら「高齢者ボランティアが小学生との交流の意義を見出すプロセス」を明らかにすることを目的として以下のような質問項目を設定した。

- ① 活動に参加するようになった経緯、きっかけ ② 参加しようと思った理由、なぜ断らなかったのかについて ③ 子どもたちとの普段の関わり ④ 関わりの中で大切にしていること ⑤ 自分自身の変化 ⑥ 継続の理由、今後について

なお、坂野ら（2004）の研究により、ボランティアの性や活動年数とボランティア活動への参加動機のあいだには有意な関連性がないことが明らかにされている。したがって、今回の分析においても、対象者の性別や活動年数は特に考慮せず分析焦点者を最終的に 13 名選出した。

VI. 分析結果

M-GTA の分析の結果、26 の概念からなる 8 つのカテゴリーとカテゴリーに属さない 1 つの単独概念が生成された。これらの概念とカテゴリーを比較検討し、次のページの結果図（図 1）とストーリーラインを生成した。ここからは、結果図で示された内容について記述する。最初に全体のストーリーラインを示し、さらにデータ該当場所（バリエーション）の一部抜粋を提示しながら概念を説明する。表記には、概念を『』、カテゴリーを【】で表した。また、データ該当箇所（バリエーション）の一部を「下線・ゴシック体部分」内に、インタビュー協力者 ID を〈 〉内に示した。

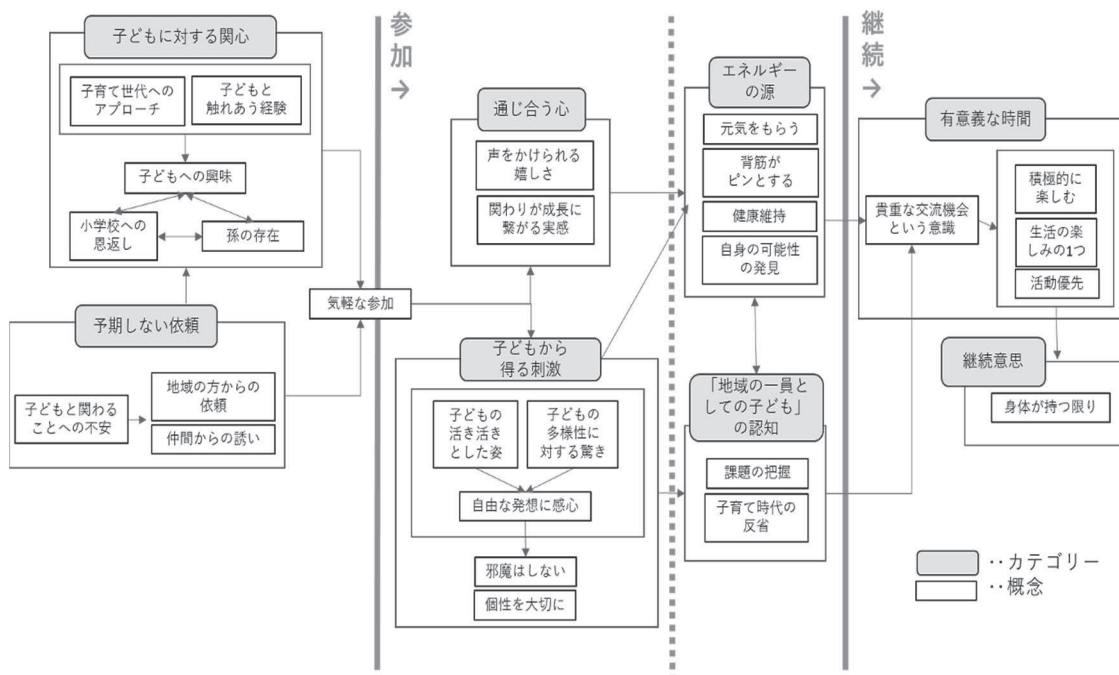


図1 結果図

1. 全体のストーリーライン

放課後子ども教室の高齢者ボランティア（以下、ボランティア）は、自発的に「放課後子ども教室」の活動を知り、参加したいと申し出るわけではなく、「地域の方からの依頼」や「仲間からの誘い」といった【予期しない依頼】によって、この活動自体を知ることになる。体力面・コミュニケーション面で「子どもと関わることへの不安」を抱えるも、仲間や地域の知り合いからの誘いということもあり、とりあえず一度参加してみようという気持ちになり「気軽な参加」に至る。さらに「気軽な参加」への後押しとなっているのは、ボランティアが抱く【子どもに対する関心】である。誘いを受けたことで、自分が抱いていた【子どもに対する関心】が引き出され、孫や子どもがお世話になっている小学校だからという理由が参加への後押しとなり、特に気負いすることなく「気軽な参加」へとつながっている。

活動に参加し始め小学生と交流するようになると、ボランティアらは交流活動を通し2つの場面に遭遇していく。1つ目は子どもと【通じ合う心】を実感する場面である。子どもたちから「声をかけられる嬉しさ」を感じたり、自分の働きかけが子どもの成長につながった経験をしたりすることが、自らの活力や自信になり【エネルギーの源】となる。また、2つ目は、様々な個性や自分たちにはできない自由な発想を持つ子どもたちの姿に感心する場面である。【子どもから得る刺激】に驚きやパワーをもらい、ボランティア自身の【エネルギーの源】にもなっていると考えられる。

そしてボランティアらはこの【子どもから得る刺激】を受け、【「地域の一員としての子ども」の

認知】をする。十人十色の子どもたちの姿を目の当たりにし、自分の地域には様々な子どもたちが住んでいることを理解する。そして「自身の子育て時代の反省」を活かす場としての認識を持つようにもなってくると考えられる。

つまり、交流活動を繰り返す中で、子どもたちの存在がボランティア自身の【エネルギーの源】となり、「地域の一員としての子ども」として、子どもたちを認識するようになっていく。これにより、そのような自分にとっても地域にとっても大事な存在である地域の小学生と交流できる放課後子ども教室の活動が貴重であるという意識につながり、これらの機会が定期的にやってくることに對して、楽しい気持ちを抱くようになっていく。さらに活動を積極的に楽しもうとする気持ちが芽生え、小学生と交流できる時間がボランティアらにとって【有意義な時間】となっていく。こうした【有意義な時間】を定期的に過ごすことが、自分の体力的な心配を考慮しつつも、できる限り活動を続けていきたいという今後の【継続意思】につながっている。

2. 各カテゴリーの説明

以下、それぞれのカテゴリーと概念について詳述する。なお、紙面の都合上、説明する概念は、参加から継続にいたる意識変容におけるコア・カテゴリー【エネルギーの源】の概念のみ紹介する。また、概念生成で用いた分析ワークシートについての例を別表5に、概念と定義の生成過程がわかるシートを別表6に示した。

2-1. 誘いから参加まで

(1) 【予期しない依頼】のストーリーライン

今回、インタビュー調査を実施した放課後子ども教室のボランティアらは、自分から活動を申し出たのではなく、地域の方や友人・仲間など他者からの誘いを受けたことで、放課後子ども教室の活動を知り、参加することを決めている。そのため、予想もしていなかった年の離れた子どもたちとの交流に不安を感じるボランティアもいたが、よく知る仲間からの誘いであることや地域の方の頼みであるということもあり、とりあえず参加してみようと活動参加につながっている。また、概念として『地域の方からの依頼』『仲間からの誘い』『子どもと関わることへの不安』が生成されている。

(2) 【子どもに関する関心】のストーリーライン

【予期しない依頼】を受けたボランティアが実際に活動に参加するようになるまでには、それぞれが抱く【子どもに対する関心】が関係し、参加への後押しとなっている。まず、ボランティアらは、放課後子ども教室の活動に参加する以前にも何かしらで『子どもと触れあう経験』がある。そうした経験のなかで子どもと交流することは楽しいというイメージをもともと抱いている人が多い。

また、自治会の役員など地域の重役を担っているボランティアは、その立場から子どもたちを通して地域の子育て世代を理解したいという思いを持っていた。こういった関心が、『子どもへの興味』につながり、孫が現在小学校に在籍していることや日頃お世話になっている『小学校への恩返し』をしたいという気持ちと相互に関係しながら、ボランティアとして活動に参加してみようという気持ちになっている。また、概念として、『子育て世代へのアプローチ』『子どもと触れあう経験』『子どもへの興味』『孫の存在』『小学校への恩返し』が生成されている。

(3) 『気軽な参加』

独立した概念として分類された。

2-2. 交流活動に参加してから継続に至るまで

(1) 【通じ合う心】のストーリーライン

放課後子ども教室の活動に参加し、子どもたちとの交流活動をスタートさせると、子どもたちがボランティアたちの顔や名前を覚え、挨拶をしてくれるようになる。子どもたちから『声をかけられる嬉しさ』は「活動に参加して良かった」と思えるほど、ボランティアにとって嬉しいものだ。また、継続的な活動を通し、大人との『関わりが成長につながる実感』をしていくうちに、子どもたちに対する愛着心が高まり、ボランティア自身の喜びや生きがいもなっている。また、概念として、『声をかけられる嬉しさ』『関わりが成長につながる実感』の2つが生成された。

(2) 【子どもから得る刺激】のストーリーライン

放課後子ども教室の活動に参加すると、ボランティア達は年の離れた子どもたちから、今までにはなかった新しい“刺激”を受ける。活気ある個性豊かな子どもたちと交流することを通して、その多様さに驚きつつも、子どもの元気さにつられてボランティア自身も明るく楽しい気分になるようだ。また、大人には考えつかないような自由で子どもらしい発想を持つ子どもたちに対し、感心させられ、その個性を大切にしたいという気持ちが芽生えている。ここでは概念として、『子どもの活き活きとした姿』『子どもの多様性に対する驚き』『自由な発想への感心』『邪魔はしない』『個性を大切に』の5つが生成された。

(3) 【エネルギーの源】のストーリーライン

放課後子ども教室で子どもたちと交流することは、ボランティアの【エネルギーの源】になる。子どもたちと【通じ合う心】を感じたり、今までにない【子どもたちから得る刺激】を受けることで、ボランティア自身が元気になったり、活動的になったりなど、身体的にも精神的にも良い影響を受けているようだ。また、ボランティアたちは、交流活動が自分の【エネルギーの源】になっていることを自覚しており、満足感を感じている。ボランティアにとって、子どもの存在が、自分の気持ちを高め維持するための大切な存在となっている。

生成された概念は以下の通りである。

①『元気をもらう』

ボランティアは、活動を通し子どもたちから元気をもらっていることを実感している。子どもたちとこういうね活動は、お年寄りみたいな私らみたいな人は元気もらえるんで、元気になっちゃうんですね。〈ボランティア B〉 やっぱ、来ると楽しいなって思います。だから、心がね、あの癒やされるし、あの精神面でね。〈ボランティア M〉 子どもたちと一緒に活動することを通して、『子どもの生き活きとした姿』を見たり、子どもに声をかけられたりすることが、自然と元気につながっているようだ。子どもと同じ時間を過ごすことは、ボランティアにとって心の癒しともなっている。（子どもと）関わると、自分の年を忘れて、いろいろやりそうになるというか。活動しそうになるという部分がありますね。〈ボランティア J〉 このボランティアは、元気な子どもたちの存在に影響され、自然と自分も活動的になれたというエピソードを語ってくれた。

②『背筋がピンとする』

子どもたちとの交流は、ボランティアたちの気持ちを引き締め、やる気をみなぎらせる。

子どもたちを見ながら、「じゃあやってみるか」っていう、自分を奮い立たせている部分もあったりして。〈ボランティア J〉 子どもたちの元気な声を聞いたり一生懸命やっている姿を見たりすることで、ボランティア自身が励まされ「私も頑張らないと」という気持ちになっている。なんか変な意気込みで、なんかピンとしちゃうんですね。反動に負けて、こう負けるもんかって。なんかこうちょっと、突っ張りかもしれないですけど。あの、なんか本当に元気を逆にもらって帰れます。〈ボランティア B〉 このボランティアは、活力溢れた子どもたちと接することで、自然と自分の気持ちが引き締められ、張り合いを持つことができている。

③『健康維持』

活動に行くこと自体が、自分の健康維持につながっているという実感がある。自分の「ああ今日のは行こう」っていう心構えとやっぱりシャキッとする。自分自身が。〈ボランティア D〉 この概念名にある“健康”とは主に精神的なもので、「活動に行く」という行為が、ボランティアたちの活力や自分を奮い立たせるものになっていると考えられる。だってね家に居ても、おじいちゃんと2人じゃね、何にもすることないから。テレビ観てるだけだから。活性化しないんです。〈ボランティア L〉 このボランティアは、家に籠もる生活に退屈さも感じており、自身を活性化するために、【子どもたちから得る刺激】を求めて、活動に参加しているようだ。

④『自身の可能性の発見』

ボランティアたちは、子どもと一緒に活動するなかで、今まで気がつかなかった自分の可能性に気づき、自信を持つことができている。張り切ってやればできないんだってね。そういうことがあるんで、やっぱここは楽しいですね。〈ボランティア M〉 このボランティアは、走る活動

を子どもたちと一緒にいったときに、自分が思っていたよりも走れたことに感激し、「まだまだ自分もできる」という自信がついた。子どもと一緒に活動していると、普段の生活では行わないことをやってみようと思えるような活力が湧き出てくるようだ。そういった自信が、活動が「楽しい」という気持ちにもつながっている。まーだ私もいくらか教えてあげられるかなって。楽しく。〈ボランティア H〉 また、このボランティアは、子どもたちに勉強を教え、子どもたちが理解してくれた時に自分の可能性を感じたという。自分もまだまだ役に立つという気持ちが、自信につながっているといえよう。

(4) 【「地域の一員としての子ども」の認知】のストーリーライン

ボランティアらは、放課後子ども教室の活動における【子どもから得る刺激】を受けることによって、活動を始める前よりも地域の子どもの特徴を理解し、その多様性を受け入れられるようになった。さらに、子どもと接するなかで、子どもたちを取り巻く課題や環境について気かけ、また自分の子育て経験と照らし合わせて子どもを見るようになった。放課後子ども教室で会う子どもたちに対し、「地域の一員」としてより親しみ深い思いを抱くように変化している。ここで生成された概念は、『課題の把握』『子育て時代の反省』の2つであった。

2-3. 継続と今後

(1) 【有意義な時間】のストーリーライン

活動を継続しているボランティアたちにとって、この放課後子ども教室の活動は【有意義な時間】となっている。放課後子ども教室での活動を通して、子どもたちと交流することが、ボランティアにとって『エネルギーの源』となっていることと、子どもたちを“地域の一員”として認識するようになったことが、放課後子ども教室に対するボランティア自身の『貴重な交流機会という意識』につながっていったのだと考える。『貴重な交流機会という意識』を持っているからこそ、活動に『積極的に楽しむ』姿勢や、活動を『生活の楽しみの1つ』とし、他の活動よりも優先して参加したいという気持ちにつながる。普段の生活であまり関わりのない「地域の子ども」と実際に接してみたことで、自分自身への何らかのメリットを感じ、子どもと交流できる時間を大切にしようとしているようである。ここでは概念として、『貴重な交流機会という意識』『積極的に楽しむ』『生活の楽しみの1つ』『活動優先』が生成されている。

(2) 【継続意思】のストーリーライン

インタビューで、今後の活動の継続意思を聞いたところ、ボランティア全員が継続していきたいという旨を話してくれた。『体が持つ限りは』と、自分の体力的な心配と周りに迷惑をかけないかという心配はあるものの、それ以外はなく、放課後子ども教室の活動に対して負担感や不満は感じていないようであった。これは、ボランティア自身がこの放課後子ども教室の活動を、自分にとって

【有意義な時間】として捉えていることが理由としてあるだろう。【有意義な時間】であり大切にしているからこそ、これからも続けていきたいという【継続意思】につながっている。ここでは概念として、『体が持つ限り』が生成されている。

VII. まとめと考察

本研究では、放課後子ども教室が高齢者の社会参加、世代間交流の場となっていることを踏まえ、放課後子ども教室で小学生と日常的に交流活動を行っている高齢者ボランティアを対象に、高齢者ボランティアが「小学生と交流する意義」を見出すまでのプロセスに注目した。

分析の結果、全体のストーリーラインで示したとおり、【子どもたちへの興味】が後押しとなり『気軽な参加』を決めたボランティアが、子どもたちと心が通じあう経験をしたり、生き活きと活動する個性豊かな子どもたちの姿をみたりするなかで、子どもたちを地域の一員として認知し、また子どもたちとの交流をと通して、自分自身の【エネルギーの源】を得ていることが明らかとなった。そして、これらが、「放課後子ども教室」の場を「貴重な交流機会」とする高齢者ボランティア自身の意識につながり、ボランティアにとって、子どもと交流できる放課後子ども教室が有意義な時間であるという認識につながっているということが分かった。

そして、田淵（2008）らを始め先行研究で十分に明らかにされていない、子どもたちとの交流のどのような過程を通して高齢者の健康感・生きがいが高めるのかについては、次のようなことが推察された。【エネルギーの源】につながっていくカテゴリーとして【通じ合う心】【子どもから得る刺激】【「地域の一員としての子ども」の認知】があった。これらのカテゴリーは、【エネルギーの源】につながっていることから、子どもとの世代間交流が高齢者にとっての【エネルギーの源】へ至る際に影響を与えていると考えられる。つまり、ボランティアの継続に至る過程において、子どもとのふれあいを通して、【通じ合う心】【子どもから得る刺激】【「地域の一員としての子ども」の認知】が重要であり、これらの意識を得やすいようなプログラムづくりやボランティアコーディネートを行っていく必要がある。

VIII. おわりに

今回の調査では、身近な地域社会において世代間交流が重要であるとの認識のもと、そうした場に参加する高齢者の意識を深く観察し、分析することで、高齢者が参加し、継続する際に重要となる要素とその構造を把握することができた。今後は、本研究で明らかにした点を実践で応用できるプログラムの開発と検証が必要である。このことで社会参加や世代間交流の場を持続可能なものとし、動員による参加やイベント的な参加に留まらない主体的に参加する高齢者が増えていくことを期待できる。

謝辞

インタビューに協力していただいた二校の放課後子ども教室のボランティアの皆さま、そしてインタビュー受入者を調整していただくとともに、多数の助言を頂いたコーディネーターのO氏、K氏のお二人に感謝申し上げます。

別表

別表 1 質的研究法の類型と発表論文数

発表年	KJ法	グラウン デッド・ セオ リー・ア プローチ	内容分析	ナラティ ブ	ライフス トーリ ライフヒ ストリー	現象学	アクショ ン・リ サーチ	フィール ドワーク	エスノグ ラフィー	エスノメ ソドロー ジーと会 話分析	論文数 の合計
2005	65	37	30	3	19	4	6	2	1	3	170
2006	85	42	55	21	21	2	7	12	2	3	250
2007	103	59	41	68	22	7	12	3	7	3	325
2008	72	59	40	70	24	2	16	4	4	1	292
2009	88	86	63	78	26	10	7	6	5	3	372
2010	69	90	74	96	26	6	3	4	5	1	374
合計	482	373	303	336	138	31	51	31	24	14	1783
%	27.0%	20.9%	17.0%	18.8%	7.7%	1.7%	2.9%	1.7%	1.3%	0.8%	100%

* 戈木（2014）の表 1 を2005年以降のデータのみ抽出し筆者再作成

戈木の整理では、それぞれの研究法の分類を以下に行っている。論文数はシソーラス機能を使って検索している。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた論文は、「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」に含まれている。ナラティブについては統制語である【語り】を使い、シソーラス機能を使って検索している。ライフストーリーについては【生活史】を使い、シソーラス機能を使って検索している。「ライフストーリー/ライフヒストリー」は重複が多いので一緒に扱った。「現象学」は、「解釈学的現象学」という用語でも検索したが、検索された文献は全て「現象学」で検索された文献と重複しているので「現象学」としている。「フィールドワーク」と「エスノグラフィー」で重複した文献が3本あった。「会話分析」は「エスノメソドロジー」から独立したものはあるが一緒に扱っている。

別表2 GTA、M-GTA、KJ法の相違

GTA	特徴	● 調査対象 現場に基づいた質的データから単なるデータの要約にとどまらず、説明力のある理論を創りだすことを目的としている。構造とプロセスを把握し、どのようにして人の相互行為や出来事が起こるかを説明するとともに、今後何が起きるか捉えようとするものである。具体的にはヒューマンサービス領域であり、例えば、健康や福祉に関してニーズをもつ当事者に援助をする人や教育活動に従事する人たちを対象することが多い。	● 切片化 データを文脈から切り離すために切片化を行う。分析者のバイアスを軽減するために有効な技法とされる。	● 留意点 GTA では概念同士の関係を明らかにして、データに あらわれた現象についての『理論』をつくりあげようとする。理論は「理論的飽和（これ以上の考え方がない状態）」により担保される。エスノグラフィや事例研究に比べ、物語性は希薄になる。しかしながら、まとまりのある仮説として提示されるので、実践場面において活用されやすい面がある。
	分析手順	①インタビュー調査から得たデータを、研究目的に該当する箇所を抜き出し、文章を内容毎に切片化する→②切片化したデータ(ex.私、あの押し花をやっている、そのときの〇〇さんの紹介で)から、「プロパティ」切り口や視点(ex.「日常的な仲間」「紹介もと」と)と「ディメンション」プロパティの詳しい内容(ex.「押し花の仲間」「〇〇さんからの紹介」)を抽出する。そしてそれらをもとにしてラベル名(ex.仲間からの誘い)を付ける。→③似たラベルを集めてカテゴリーをつくり、カテゴリー名を付ける(②③をオープンコーディングと呼ぶ)→④カテゴリーを分類し、各現象に対して1つのカテゴリー関連図をつくる。中心となるカテゴリーを1つ選んで、現象の名前にする→⑤プロパティ、ディメンション、ラベル、カテゴリー、サブカテゴリーに着目してカテゴリー関連図を文章にした抽象度の低い理論をつくる→⑥2例目の分析からは、カテゴリー関連図をこれまでにつくった同じ現象に関する関連図と合わせたカテゴリー関連統合図をつくる。そしてそれをもとにストーリーラインを書く。→⑦不足するデータを理論的サンプリングをもとに追加調査する。これまでの段階を繰り返す(④～⑦を軸足コーディング(axial coding)と呼ぶ)。→⑧いくつもの現象をカテゴリー関連統合図として把握したら各統合図の中心となるカテゴリー同士を、プロパティとディメンションに着目して関連づけ、文章化し抽象度の高い理論をつくる。		
	その他	GTAにおける「理論」とは、研究対象として必要なデータを収集・分析し、概念化する。これを、新たに重要な概念が生成されなくなるまで理論的サンプリングでデータを収集し繰り返す。新たに確認すべきことがなくなったときに理論的飽和と判断し、新たに導出された理論と考える。		
M-GTA	特徴	● 調査対象 GTA同様に理論生成を行うことが目的であるが、GTAに比較し、具体的な研究目的に応じ、誰が誰に研究成果を伝えようとするのかを重視しながら理論的飽和を目指すことから、結果として理論の対象は狭いものとなる。分析者と分析焦点者(インタビュー対象者)が明確であり、その関係にもどづいた理解を重視する調査に向いている。	● 切片化 データを切片化しない。分析ワークシートを用いて分析するため、文脈に元づいた解釈が可能である。	● 留意点 GTAが分析者の恣意性を排除しデータを細分化するのに対し、M-GTAは、分析者の問題意識に基づいたデータのコンテキストの理解を重視している。意味を解釈する人間つまり「誰が」を重視し、意味の選択的判断を行う人間を「研究する人間」という表現で強調した分析方法である。
	分析手順	①インタビュー調査から得たデータを、研究目的に該当する箇所を抜き出し、分析ワークシートを用いて「概念」を生成する(一つ概念につき一つのワークシートを作成)。→②これを一人の調査データから概念を出し切る。→③複調査対象者全員に対して繰り返す。→類似する概念をまとめる(カテゴリー化)。→④さらに中心となるカテゴリー(コア・カテゴリー)を抽出する。→⑤コアカテゴリーを中心として全体の結果図を作成→⑥プロセスに着目したストーリーラインを作成する。		
	その他	修正版GTAでは理論的飽和化を二つの面から検討する。一つは分析結果から立ち上がってくる部分の完成度という側面があり、もう一つは、結果のまとまりが論理的密度をもって成立し得るデータの範囲の調整も行うのであり、このバランスで理論的飽和化を判断する。この結果現れたものが新たに導出された理論と考える。		
KJ法	特徴	● 調査対象 本来はフィールドワークによって得られた膨大な観察結果を整理することが目的であった。大量のデータを俯瞰して整理する必要のある調査に適している。データが少ない場合は向かない。そして図解化し、グループごとの関係から新たな発想を得ようとする目的をもつ調査に用いられる。	● 切片化 言葉や観察などから得られたデータを内容ごとにカード化するが、GTAのようにバイアスを軽減することが目的ではない。つまりGTAの切片化とは異なる。カード化する調査者の用いる最小の概念として扱われる。	● 留意点 KJ法とは質的データをグループに分類することを通じて新たな発想を生み出すことを目指した研究法であり、グループ分けすることが目的ではない。つまりグループ分けを通じて何かを生み出すことが目的である。よって上記のような方法は厳密に言えばKJ法ではなく、「KJ法におけるグループ分けの手法を使った」と記述するのが適切である。
	分析手順	①データの単位化(カード化*付箋紙に記入)→②ラベルづくり(各カードに1行見出しをつける)→③似たラベル同士で小グループ化→④各グループにタイトルをつける→⑤中グループ化(必要に応じて大・特大とグループ化する。*グループが10程度になるとよい)→⑥図解化(グループ同士の関係を明確化)→⑦それぞれのグループの関係に着目して叙述化する。		
	その他	研究の科学的な方法を担保するために、データ収集段階(データ収集や加工)、分析段階(ラベル作り、グループ編成・図解化・叙述化)、結果の提示段階という、現象の構造化に向けたすべてのプロセスに関わる諸要因をできる限り開示することが重要である。		

*木下(2007b)、木下(2014)、木野(2020)をもとに筆者の研究・実践経験を加えて作成。

別表 3：GTAにおける切片データ プロパティ ディメンション ラベルの例

No.	データ	プロパティ	ディメンション	ラベル名
1	私あの、押し花を少しやってまして、その時にここにいらっしゃる〇〇さんの紹介で、少しやってみませんかと言われたんで。そうゆうのやってみることも知らなかったし。たまたま誘いがあったので。	日常的な仲間 紹介者 活動への関わり の程度 誘い 活動内容 声かけの仕方 「ので」が意味するもの	押し花の仲間 〇〇さんからの紹介 少し やってみませんか そういうの（学童） たまたま 誘いに対する応答の態度	仲間からの誘い
2	自治会の他の仲間から。他の地区のね。〇〇地区も出てくれないかねって。ゼロになっちゃったからね。うん、それがきっかけ。で、誰がなるかってなって、はい分かりましたってそういう感じ。	依頼者 地区ごと 担い手の数 担い手の対象者 関わることへの消極的な気持ち	自治会の他の仲間から 〇〇地区も出てくれないかね ゼロになってしまう 誰がなるか はいわかりましたってそう	地域の方からの依頼
3	きっかけはまず、自治会の役員さんか	自治会		

別表 4：KJ 法の研究プロセスと結果を評価するための評価基準

データ 収集段階	(1)データ収集方法やフィールドでの研究者の関わり度 合いを明示しているか
	(2)データの加工方法を示しているか
	(3)データの質と量は研究目的に対して適切か
	(4)対象となる調査協力者について詳細に記述されているか
分析段階	(1)グループ編成はデータをして語らしめているか
	(2)表札づくりのプロセスが可能な限り透明化されているか
	(3)図解は他者と納得が共有できるものか
結果の 提示段階	(1)叙述化は図解に沿って目的相關的に構成されているか
	(2)結論と共にデータと図解が提示されているか
	(3)結論を明示し、現象を構造化しているか

田中（2010）の表を筆者再作成

別表 5 分析ワークシート例

概念 18	元気をもらう
定義	子どもたちから元気をもらっているという実感がある。
バリエーション（具体例）	
（B氏、5頁）	*でもね、こう子どもたちとこういうね活動は、お年寄りみたいな私らみたいな人は元気もらえるんで、元気になっちゃうんですね。
（B氏、5頁）	*自分も含めて楽しんです。元気をもらってます。ここに来るとね。学校の通学路でもげんきもらって。まあ、お互いに、ああまた頑張れるっていう気になります。ほんとそうです。また明日もって。
（H氏、3頁）	*なんか、何だろう。ま、子どもたちに元気よく、あの挨拶されると。今まではほら、あんまり接してなかったからね。そうすると、あれがあって、こう、うっとね（避けてた）。よろしくねーなんて言って。でも、子どもの声聞くとやっぱり自分も明るくなりますよね。
（J氏、2頁）	*現職中はやっぱりこう、どっちかっていうと子どもたちからこう、元気をもらっていたっていうか。という部分があったんですね。まあ、仮設校舎でずっと過ごしていたんで。子どもたちと一緒に。人数の少ない学校でいたんで。でも、そこでこう続けられたっていうのはやっぱり、子どもたちのパワーから元気をもらって続けて来れたっていう部分があって、まあ退職をしたんで。で、そのまま子どもたちとの関わりができればなって思っていて。やっぱりこちらに来て関わると、自分の年を忘れて、いろいろやりそうになるっていうか。活動しそうになるという部分はありますね。
（M氏、3頁）	*でもただ今やっぱり、来ると楽しいなって思います。だから、心がね、あの癒やされるし、あの精神面でね。すごくやっぱり、身体疲れますよ、結構。
理論的メモ	
・元気をもらう＝参加継続の最大理由で良いのか？10/15 ・元気をもらうと具体的にどうなるのか、どう変わるのか？逆に、変わったから元気をもらたと感じているのか？10/15 ・J氏、子どもから元気をもらって経験をしてきたことが、活動の参加動機になってそう11/2 ・J氏、「自分の年を忘れていろいろやりそうになる」＝元気になる、活力が出る。 ⇒概念25とも似ている概念11/2	

別表6 生成概念と定義の作成経過

生成概念		定義	バリエーション数
1	子育て世代へのアプローチ	地域の役員という立場から、地域の子育て世代が考えていることや求めていることをより理解したいと思う気持ち。	1
2	課題の把握	子どもたちと直接触れあうことを通し、現代の子どもたちに関する課題を把握することができている。	2
3	地域の方からの依頼	地域コーディネーターが地域の重役と連絡を取り、放課後子ども教室の活動スタッフとして適した人材を紹介してもらっている。	5
4	活動を通し実感する子どもの成長	放課後子供教室を実施するようになってから今までに、地域の子どもたちの変化を実感している。	2
修正概念4: 関わりが成長につながる実感		地域の大人が子どもに関わるのが子どもたちの成長に繋がったという実感	
5	声をかけられる嬉しさ	顔見知りになった子どもたちが、自分から声をかけてくれることに対する嬉しさ。	8
6	貴重な交流機会という意識	普段、子どもたちと交流する機会がなく、数少ない交流の機会となっている放課後子ども教室の活動を大切にしている。	6
7	シルバー大学校の学びを活かす	シルバー大高校で学んだ経験を自分の地域に持ち帰り、自ら生かそうとする使命感	廃止
8	身体が持つ限り続けたい	自分の老いを自覚しつつも、身体が持つ限りは活動を継続していきたいと思っている。	10
9	交流を増やしたい	放課後子ども教室で子どもと大人が交流する頻度を現在よりも増やしたいという気持ち	廃止
10	個性を大切にしたい	子どもたちが持つ個性や意見を引き出す活動に関心があり、その個性を大切にしたいという気持ち	1
11	小学校への恩返し	自分の子どもや孫がお世話になった、また現在お世話になっている小学校に対し、自分も何か手伝いがしたいという気持ち	3
12	子どもと関わることへの不安	普段の生活であまり関わることのなかった、年の離れた子どもと関わることへの不安があった。	3
13	子どもの多様性に対する驚き	学年による成長の違いや、性格や個性の違いなど、子どもの多様性に驚く。	4
14	心が開く瞬間	活動者に対し、子どもが心を開いてくれた瞬間に立ち会った嬉しさ	修正概念4に統合
15	きっかけを作ることの大切さ	自分が子どもたちに働きかけを行うことで、子どもたちは変化し成長することができるという気づき	修正概念4に統合
16	自由な発想に感心	大人にはない、子どもならではの自由な発想や行動に感心し、その姿を見て元気をもらっている。	6
17	声をかけるタイミング	子どもに声をかけたい気持ちがあるが、そのタイミングに難しさを感じている。	廃止
18	元気をもらう	子どもたちから元気をもらっているという実感がある。	4
19	背筋がピンとする	活動的な子どもたちとの交流を通して、気持ちが引き締められ、やる気がみなぎる。	3
20	積極的に楽しむ	子どもたちとの活動に、活動者自身も積極的に楽しんでいる。	4
21	孫のように	なかなか会えない自分の孫の代わりに、地域の子どもたちとの交流を大切にしている。	廃止
22	今を楽しく生きたい	若いときに苦労してきたからこそ、今を自由に楽しく生きていこうと思っている。	廃止
23	気軽な参加	あまり思い悩むことなく、気軽に活動に参加できている。	4
24	子どもへの興味	今の子ども達がどのような生活を送っているのか、興味を持っている。	3
25	健康維持	活動に行くことが自身の健康維持に繋がっていると実感している。	4
26	役に立ちたい	子どもをただ見守るだけではなく、もう少し運営の助けになりたいという思い。	廃止
27	地域を照らす存在	地域にとって、子どもという存在がとても大切であると感じている。	廃止
28	昔とは異なる家庭環境への適応	昔と今の家庭環境の違いを思い、子どもとの接し方に注意を払っている。	廃止
29	つながりができる	活動に参加したことで出会った人々たちとのつながりに対する満足感	廃止
30	特技が活かせる場	自分の特技を活かせる活動でやりがいや楽しさを感じている。	廃止
31	活動優先	他の用事が入っていても、交流活動の方を優先に参加している。	2
32	邪魔はしない	子どもたちの活動を邪魔しないように見守っている。	2
33	生活の楽しみの1つ	活動に来ることが毎月の楽しみになっている。	4
34	仲間からの誘い	サークルの仲間や友達など、よく知っている人物から誘われて活動に参加するようになった。	6
35	子どもの生き生きとした姿	子どもたちが生き生きと楽しそうに活動している姿をみる。	3
36	子育て時代の反省	子どもたちと接することを通して、自分の子どもが幼い頃や当時の子育てを改めて振り返っている。	5
37	子どもと触れあう経験	これまでに、子どもと触れあひ楽しかった経験を持っている	2
38	自身の可能性の発見	子どもとの活動のなかで、自分では気がつかなかった可能性に気づき、自信に繋がった。	2
39	孫の存在	在学中の孫がいることが、参加への後押しになっている	4

表中のグレーの網掛け箇所は、バリエーション数が少なく、概念の統合や廃止を検討したものである。作業過程において 39 の概念を生成し、10 の概念を廃止、3 つの概念を統合した修正概念（N04）を 1 つ生成しなおした。

 参考文献・参考 URL

- [1] Glaser, Barney and Strauss, Anselm, 1967 The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research, New York: Aldine Publishing Company
- [2] Glaser, Barney, Theoretical Sensitivity, 1978 Advances in the Methodology of Grounded Theory, Mill Valley: The Sociology Press
- [3] Glaser, Barney, 1992 Basics of Grounded Theory Analysis: Emergence vs. Forcing. The Sociology Press, California
- [4] Strauss, Anselm 1987 Qualitative Analysis for Social Scientists, Cambridge: Cambridge University Press.
- [5] Strauss, Anselm & Juliet, Corbin, 1990 Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Technique
- [6] 糸井和佳、亀井智子、田高悦子他（2012）「地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果-文献レビュー-」日本地域看護学会誌 15 巻、pp.33-44
- [7] 川喜田二郎（1967）『発想法』、中央公論新社
- [8] 木野泰伸（2020）「概念化プロセスにおける質的研究手法とテキスト分析手法の比較」統計数理研究所、第 11 回横幹連合コンファレンス、2020 年 10 月 8-9 日
- [9] 木下康二（2003）『グラウンテッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂
- [10] 木下康二（2007a）「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の分析技法」富山大学看護学会誌、第 6 巻 2 号、2007、pp.1-10
- [11] 木下康二（2007b）『ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
- [12] 戈木クレイグヒル滋子（2014）「グラウンデッド・セオリー・アプローチ概論」慶應義塾大学湘南藤沢学会「Keio SFC journal」、14 巻 1 号、pp.30-43
- [13] 坂野純子、矢嶋裕樹、中嶋和夫（2004）「地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感への関連性」東京保健化学学会誌 7 巻 1 号、pp.17-24
- [14] 1 田中博晃「KJ 法入門：質的データ分析法として KJ 法を行う前に」外国語教育メディア学会（LET）関西支部メソドロジー研究部会 2010 年度報告論集 pp.17-29
- [15] 田淵恵（2008）「地域の祖父母世代の子育て支援動機に関する質的研究」『生老病死の行動科学』（13） pp.33-43
- [16] 速水敏彦（1995）「外発と内発の間に位置する達成動機付け」心理学評論 38 巻、pp.171-193
- [17] 藤原佳典、西真理子、渡辺直紀他（2006）「都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモ-

ションプログラム“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果」日本公衆衛生雑誌 53 巻、pp.702-714

- [18] 藤原佳典、渡辺直紀、西真理子他（2007）「児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因“REPRINTS”高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から」日本公衆衛生雑誌 54 巻、pp.615-625
- [19] 内閣府（2018） 高齢社会対策大綱（平成 30 年 2 月 16 日閣議決定） 2021 年 4 月 1 日閲覧 <https://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/h29/hon-index.html>

-
- ¹ 1967 年に出版された『The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research』Glaser,B & Strauss,A（1967）で初めて紹介されている。その約 10 年後の 1978 年に、グレーザーが、1967 年版において不明瞭だった部分を補う形で Glaser,B（1978）を出版する。そして、1967 年版から 20 年後の 1987 年にストラウスが改良した（Strauss,A 1987）を出版している。さらにストラウスは 1990 年にコービンとともに共著 Strauss,A & Corbin,J（1990）を出版し、1992 年に今度はグレーザーが Glaser,B（1992）を出版している。GTA は、1967 年のオリジナル版、1990 年のストラウス&コービン版、1992 年のクレイザー版、そして木下の M-GTA を合わせ現在 4 つのタイプに分かれており、分析方法が異なっていることに注意が必要である。本稿の GTA で紹介しているのでは、戈木（2014）が紹介しているストラウス&コービン版である。
- ² 開発した木下は、木下（2007b）M-GTA は、1967 年のオリジナル版の検討から、その可能性を実践しやすいように改良された質的研究法で、『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践一質的研究への誘い』（木下、2003）において 初めてまとまった形で提示されたと述べている。
- ³ KJ 法は、GTA と同じ 1967 年に書籍『発想法』を発行している。文化人類学者である川喜田二郎が、ネパール探検などで入手した膨大な研究データをどう整理して分析するかに頭を悩ませ開発したものである。この手法が一般的な課題解決や企業の経営戦略にも活かせると気づき、体系化した結果、KJ 法が誕生したという経緯がある。このため質的研究法ではなくあくまで発想法である点に注意が必要であり、質的研究法として用いる場合には、本稿別表 4 で整理した点を丁寧に行わなければならない。
- ⁴ M-GTA によるインタビューでは、木下（2007b）によれば、通常、主要な質問項目を準備してそれらについて相手がだいたい 1〜2 時間くらい自由に、自分のペースで話してくれれば大きな問題はないとしている。今回のインタビュー調査の時間はやや短く 1 人から得られるデータ量としては少ないと考えられる。